

## 中日言語におけるテキストの結束性について パラグラフの統一性を中心に

于 增輝

The unity text in Chinese and Japanese  
centered on the uniformity of paragraph

Yu Zenghui

### 摘要

通常の言語学只把句子作为语法研究的最大的分析单位，一般只分析一个句子内的语言规则。实际上我们在使用语言时，很少使用单个句子，多是几个句子组成一个段落来表达我们的意志。另外，从现实中具体的情况来看，我国日语学习者在学习日语时大都会遇到符合语法的句子但就是不自然或者文章内容难以把握的现象，这已经成为单纯的词汇和语法所不能解释、解决的问题。所以，不仅在理论上，在现实的实践中也要求我们把分析的范围从句子扩展到整个篇章。

把握篇章整体的连贯性，笔者认为应该从单个段落内部的统一性和段落之间的连贯性这两个方面来把握。而这两个方面中，首先要弄清楚单个段落是怎么实现其统一性的，只有分析一个段落的内部结构，整个文章的连贯性才能了然于胸。通过运用韩礼德 (Halliday) 与哈桑 (Hasan) 的连贯与衔接理论<sup>[1]</sup>、日本语言学家森冈健二的文章结构理论<sup>[2]</sup>，从段落主题的展开、语法手段这两个方面来探求篇章中单个段落的统一性。

## 1. はじめに

イギリス人は、言語研究においてテキストの研究が大変重要だということをずっと昔から認識したため、テキストについての研究が発達している。そのうち、Halliday and Hasanの『英語の銜接』、『機能文法入門』はその最も代表的なものである。これに対して、中国ではテキストの研究が遅く、しかも、テキストの結束性について、今までの資料は少なく、系統性がないばかりでなく、中英対照のものばかりである。従って、一つの側面から中国語のパラグラフの統一性を把握することは、更に重要なことになっている。筆者は、日本語学習者として、日本語のテキストの研究に非常に関心を持っている。日本では、日本語のテキストの研究について、多くの学者は力を入れていた。しかし、パラグラフの主題展開は詳しく論じられたが、ほかの接続方式でパラグラフの統一性を把握することに関する研究は少し足りないのではないかと思う。そこで、系統的に日本語のパラグラフの統一性を論述することは本稿の目的の一つである。

## 2. 先行研究

### 2.1 中国側の先行研究

#### 2.1.1 テキストについて

中国のテキストについての研究は文章学の形式で現れたのである。嘯馬、遊友基氏の『文章原理初探』(1980)、張寿康氏の『文章学概論』(1983)、李徳華氏の『文章語句学概要』(1984)などがある。また、中国の言語学者は英語のテキスト理論を応用し、中国語と英語の対照研究を通して中国語のテキストの理論を提出した。許余龍氏の『対照言語学概論』(1989)、胡壯麟氏の『語篇の銜接と貫通』(1984)、張徳禄、劉汝山氏の『語篇銜接と貫通理論の発展及び応用』(2003)、錢敏汝氏の『語篇語用学概論』(2001)などはこのような著作である。

#### 2.1.2 パラグラフについて

董魯安氏は『修辞学』において、「段の組織」<sup>[3]</sup>を論述した。しかし、段

と段の間の関係は論述されただけで、段内部の組織問題は論じていなかった。張志公氏は『漢語知識』の第五章において、「文章の段落」、具体的に「段落の中心思想」、「段落の単一性と統一性」、「段落に文と文との繋がり」を論述したが、十分に展開していなかったのである。このうち、赫長留氏編の『文段知識』の第二、三章がそれぞれ文段の構造と文段の組み立てを挙げ<sup>[4]</sup>、鄭文貞氏の『段落の組織』は段落の構成と種類、段落内部の繋がりを具体的に列挙して下さったのである<sup>[5]</sup>。

## 2.2 日本側の先行研究

### 2.2.1 テキストについて

日本では、テキストの結束性について、数多くの言語学者は研究していたと言える。高崎みどり氏の『文章における反復語句および関連語句の機能』（1980）、池上嘉彦氏の『テキストとテキストの構造』（1983）、永野賢氏の『文章論総説』（1986）、黒岩浩美氏の『文章の結束性について一接続関係の分析からみた学習者の問題点一』（1994）、橋内武氏の『ディスコース・談話の織り成す世界』（1999）、野村眞木夫氏の『日本語のテキストー関係効果様相』（2000）などが挙げられる。このうち、時枝誠記氏は文章研究について、「文章を文の集合であって、幾つかのまとまりを持った言語表現と規定すると、まとまりのある表現には、文があり、語がある。しかし、これらは、それぞれに、文章とは、異なった原理によって統一されたものである。文章といふ一つの統一體の中に、それとは個別の原理による語、文といふ統一體を含んである有様は、国家という社会の中に、都市とか、農村とか、家族とかいふ社会を含んであるのに似ている。社会学が、これらそれぞれの社会の性格を問題にするやうに、文章研究は、文章といふ統一體の原理を明らかにしようとするものである。文章が、一つの統一體であるといはれるのは、それが何ものにも従属せず、それ自身、完全に自立してゐることから、文とか自立してゐることから區別される。」<sup>[6]</sup>と主張していた。

### 2.2.2 パラグラフについて

パラグラフの統一性も数多くの言語学者に研究されていた。永野賢氏は『文

章論総説』（1986）において、文章の成分としての段落を研究した。盛岡健二氏は『文章構成法』において、段落を一章として探求した。佐久間まゆみ氏は『文の文法と文連続の文法—文章の文法への志向—』において、「文連続の文法」の領域（文接続論、接続）、文連鎖論（指示、反復、省略、提題、説述、引用）などを論述した。このうち、永野賢氏はパラグラフについて、「内容上のいくつかのまとまりごとに、行を改めて書かれるのが段落である。主題について説明したり、題材の配列や文の接続・連鎖・統括などでいろいろ複雑な構成と持っているのである」と主張していた。<sup>7)</sup>

### 2.3 中日言語におけるテキストの結束性についての先行対照研究

中日言語を比較しながら、テキストの結束性を探求した学者はほんとうに少ない。筆者はいろいろ資料を探してみたが、結果として、CNKIデータベースにおいて、一つしか探すことができなかった。朱峰氏の『テキストにおける中日指示語の承前機能について』である。

### 2.4 中日言語におけるパラグラフの統一性についての先行対照研究

中国語におけるパラグラフの統一性研究と日本語におけるパラグラフの統一性研究はそれぞれ多少あるが、中日言語におけるパラグラフの統一性対照研究があまり多くないと思われる。筆者が探せた資料の限り、三つだけ見つかった。一つは馬蘭英氏に書かれた『日本語段落の語彙繋がる方式』で、中国語と日本語を対照しながら、日本語の語彙の繋がる方式を探求した。あとは李登貴氏の『中日テキストにおける第三人称について』、施建軍氏の『中国語の主題と基本構造——中日比較の立場から』（2001）しか挙げられない。

## 3. 定義と関係

### 3.1 テキストとパラグラフ

#### 3.1.1 テキストとは

いくつかの文が集まり何らかのまとまりを持ったものをディスコースと言う。ディスコースのことをテキストと呼ぶこともある。また、テキストは書き言葉と話し言葉を含めるから、文章・談話とも言う<sup>8)</sup>。

テキストとは、人の行う言語活動において、あるまとまりを持った表現の具体相を表す<sup>[9]</sup>。

テキストという語は「談話」、「ディスコース」などと呼ばれるものである。そして、「談話」とはいくつかの文（一つだけの文でもかまわないが）常識的に見てひとまとまりの言語表現になっているものをいう。話し言葉、書き言葉の別は問わない<sup>[10]</sup>。

テキストとはすべて文法約束を受けていなくて、一定の語境で完全な語義を表す自然言語である<sup>[11]</sup>。

テキストとは形式上にも意味の上に全体としてまとまりのある言語表現であり、コンテクストなしで、形式的に解釈される一連の言葉で、話された（また書かれた）ことばそのものを指す。つまり、実際の発話の中に出てくる言語表現そのものをいう。従って、テキスト語句や文で表される字義通りの意味（表意）であって、聞き手（または読み手）が推し量る言外の意味（推意）を含まない。このように専門用語としてのテキストは文と文の関係を通して解釈される命題上の意味「論理の意味・意味論の意味」のことをいう<sup>[12]</sup>。

### 3.1.2 パラグラフとは

パラグラフは小主題によって統一された文の集合である<sup>[13]</sup>。

パラグラフは二つの意味があって、一つは自然段落、もう一つは意味段落である。本稿の研究は自然段落を指している。自然段落というと、行を変えてまた統一の意味を表す言語単位のことである<sup>[14]</sup>。

パラグラフとはギリシア語の「側」（para）と「書くこと」（graphein）との複合語で後に、これが文章の段落の意味に転用されるようになったのである。パラグラフという語は、元々表記上の形式に対して冠せられた名称であるが、しかし、その発生の動機は、意味の区切れ、つまり、意味の一まとまりを形式にも区別しようとするこゝもあつたわけである<sup>[15]</sup>。

パラグラフ（paragraph）は比較的長い談話、文章の中の部分として区分され、それぞれが小主題を持って統一されている文集合の切れ目、または、その文集合の全体。段、分段、段落等ともいう。今日の文章では、段落の初

頭は一字下げの体裁で行を改めるのが例である<sup>[16]</sup>。

### 3.1.3 テキストとパラグラフの関係

テキストははじめから終わりまで、必ずしも同じ調子で続いているものではない。主題そのものも、ひとつでなくいくつかの細目に分かれる場合もあるわけだし、また、主題について説明するほかに、前置きを述べたり、具体的な事例を引いて証明したり、反対の立場のものと比較対照したり、比喩を用いたり、題材の配列や文の接続・連鎖・統括などでいろいろな複雑な構成を持っているものである。従って、テキストは、内容上のいくつかのまとまりごとに、行を改めて書かれるのが普通である。パラグラフは長い文章の部分として区別され、それぞれの部分的な主題に関して設けられるが、文章全体の主題に緊密に関係付ける必要がある。比喩をもつていうならば、文章を鎖だとすれば、パラグラフは個々の輪に相当し、相互に緊密な関係がなければならぬ。従って、テキストを構成する直接成分のパラグラフの統一性の研究を手続きとして、テキストの結束性も触れられると考える。

## 3.2 テキストの結束性とパラグラフの統一性

### 3.2.1 テキストの結束性とは

テキストが言語としての働きを持つためには、テキストが何らかのまとまりを持つことが必要である。テキストは主題によって統一され、主題文によって要約されなければならない。このテキストのまとまりを結束性と言う<sup>[17]</sup>。

池上嘉彦<sup>[18]</sup>は、「結束性」について以下のように述べている。「テキスト性」を支える構造的な要因としては、大きく分けて三つのもの——「結束性」(cohesion)、「卓立性」(prominence)、および「全体的構造」(macrostructure)——を考えることができる。「結束性」は典型的には文と文との間の続き具合の問題であり、狭義の「微視的構造」(microstructure)に関するものと云える。

結束性とは、文に一貫性を持たせ、一連の文法的に独立した文を結びつけ、テキストにテキスト性を与える言語的な記号のことをいう<sup>[19]</sup>。

結束性 (cohesion) とは、語と語、句と句、文と文が互いに結び合っ

とまりのあるテキストを作り出すことという<sup>[20]</sup>。

### 3.2.2 パラグラフの統一性とは

いくつかの文は小主題を巡って、一つの内容上のまとまりを形成することはパラグラフの統一性と言われる。

### 3.2.3 テキストの結束性とパラグラフの統一性の関係

テキストはいくつかのパラグラフから構成される。従って、テキストの結束性はパラグラフそのものの自身の統一性とパラグラフ間の結束性に分けると思っている。テキストの直接成分としてパラグラフの統一性が分からなければ、テキストの結束性が研究できないと考えている。

## 4. 中日言語のテキストの結束性

テキストの結束性は一つ一つのパラグラフ内部の統一性と各パラグラフ間の結束性からなっていると思う。本部分はパラグラフ内部の統一性を中心として論述したいと考えている。

### 4.1 パラグラフ内部統一性の方式

#### 4.1.1 同じ主題で貫かれていること及びその展開

パラグラフが長い文章の部分として区切られるのは、部分としてのまとまりを持つべきだからであって、まとまりがなければ部分として区切られる必然性がない。とにかく、一つのパラグラフの中に、いくつもの小主題があって、中心がないとしたら、支離滅裂な文章となることには疑いない。従って、同じ主題を貫かれることは、パラグラフの統一性に、文章全体の結束性に大変重要な役割を果している。

##### 4.1.1.1 中国語の小主題の展開

パラグラフになれるのは、基本的な要求が単一で統一することである。つまり、集中的に一つの観点或いは一つの事実、情景、感情を表すことである。これらのことは述べる中心になり、小主題として、ほかの部分はこれを巡って展開する。中国語において、主題は論説、評論によく利用され、小説の中でも時々見られる。この主題もトピック・センテンス(topical sentence)と呼

ばれ、パラグラフの冒頭、真ん中、最後に位置することができるが、冒頭に位置するのが一番多いのである。

a.トピック・センテンスがパラグラフの冒頭に位置すること

蜜蜂是画家的爱物，我却总不大喜欢。说起来可笑，小时候有一回上树掐海棠花，不想叫蜜蜂蜇了一下，痛得我差点跌下来。大人告诉我，蜜蜂轻易不蜇人，准是误以为你要伤害它，才蜇；一蜇，它自己就耗尽了生命，也活不久了。我听了，觉得那蜜蜂可怜，原谅它了。可是从此以后，每逢看见蜜蜂，感情上疙疙瘩瘩的，总不怎么舒服。

(杨朔《荔枝蜜》)

このパラグラフの中心は「私は蜂が好きではない」である。後はどうして好きではないかを説明した。この中心を巡って述べることによって、全体感が感じられ、一つのパラグラフになれるのである。

二十九岁的老姑娘，走到哪儿，哪儿都投来叫人难以忍受的目光：怜悯、讥讽、戒备、怀疑……怜她茕茕孑立，形影相吊；讥她眼界过高，自误终身；戒她神经过敏，触景伤情；疑她歇斯底里，性格变态……

(堪容《减去十岁》)

初めは人々がいい年になっても結婚していない女に対する四つの目付きを論じ、これからの文はこの四種類の眼差しを巡って展開したのである。

b.トピック・センテンスを最後及び中間に

中国語の主題文はパラグラフの最後に位置するのが少ないのである。最後に位置する時、一般的には段落を概説し、さらに主題を深めることを目的とするのである。

从朝鲜回来的人，会知道你正在生活在幸福中，请你意识到这是一中幸福吧，因为只有你意识到这一点，你才能更了解我们的战士奋不顾身的原因。朋友！你是这么爱我们的祖国，爱我们的伟大领袖毛主席，你也一定会深深地爱我们的战士，---他们确实是我们最可爱的人！

(魏巍《谁是最可爱的人》)

志願軍戰士の事跡を読んだら、読者はきっと作者と同じ気持ちになるであ



ろう。段末の「他们确实是我们最可爱的人」は点睛の文で、パラグラフの主題であり、それに、文章の主題を突出することができる文でもある。

#### 4.1.1.2 日本語の小主題の展開

日本語のパラグラフでは名詞と提題助詞「ハ」とが結びついた「主題」はパラグラフに構造を与える上に重要な働きをしている。この提題表現はこのパラグラフのトピック・センテンスと呼ばれる。トピック・センテンスはパラグラフの冒頭に位置するか、パラグラフの中間或いは最後に位置するか、またはトピック・センテンスが表面に現れぬ場合もあるかの三つの方面があって、小主題を展開して、パラグラフの統一性が実現でき、テキストの結束性を生み出すことができると思われる。

##### a. トピック・センテンスがパラグラフの冒頭に位置すること

パラグラフの冒頭に位置するトピック・センテンスが次の主題に行き当たるまでの領域を自分の領域としてまとめあげ、パラグラフに構造を与えているのである。パラグラフでは一度提示された主題はそれ以下の文において省略され、その省略を通して次の主題に至るまでの領域を一つのまとまりを持ったものである。すなわち、一つの話題になって、パラグラフの統一性を備えたものとしているのである。

陳述の主観性により

一つのまとまりには一般的にトピック・センテンスがあると思われる。ムードの基本理論によると、トピック・センテンスは作者或いは話し手の主観的な態度、認識を表すことができると言っている。この態度、認識と関する話題がよく出てくるから、主題の展開になり、文をまとめて、統一性を生み出しているのである。

①十月の晴れた富士山の頂上からの眺めは本当に美しいものでした。②北には、富士五湖が青々と水を堪え、南には、伊豆の山々が連なって見えました。③山すそののびたところに派、静浦、田子の浦、三保の松原、清水港などが、一望の下に見下ろせて、その美しい眺めが到の心を楽しませてくれました。

このパラグラフにおいては、①が小主題で、文末には話者の感嘆を表した。

どうして感嘆するかを詳しく説明する必要があるから、文脈が展開したのである。主観的な陳述は様々な意志、願望、決心の文を含めるのがいうまでもない。従って、小主題は話者の意志、願望、決心を含める限り、どんなに婉曲でも、文脈を必ず展開するのである。

陳述の概要性質により

一つのまとまりにおいて、トピック・センテンスは物事の大筋を叙述する時、普通が後ろのセンテンスによって具体的な内容が陳述される必要がある。従って、この方式を通して、一つの統一性が生み出せる。

①ホテルに帰ると電話がかかってきた。②何事であろうと思うと、サービスの女の子からで、「窓からご覧ください、夕映えが美しいです。」と教えてくれた。トピック・センテンスは①である。最初は「電話が来た」だけを説明した。だれからの電話、また何の電話かは全くわからないから、文脈を展開する必要があるのである。

存在文により

トピック・センテンスが存在文である場合、文脈は自然に展開することができる。存在文は具体的な存在と抽象的な存在に分けられる。例一は具体存在文で、例二は抽象存在文である。

〔例一〕①店からどんがり帽をかぶったやつが出てきた。②魚屋のせがれだった。

〔例二〕①そのときどうしたことか、僕の目の前に急に、さっきのS駅の窓口<sub>に</sub>いた駅員の顔が浮かんだ。②ぶっきらぼうだった横顔のほおのあたりの黄色い膚の色が、なんだかひどく疲れきった感じて思い出され、ふと、あの駅員が家に帰ると、病気の母親が待っていそうに思われた。

(安岡章太郎『幸福』)

b.トピック・センテンスを中間及び最後に

「あるがままに書こう」、「正直に書こう」美文の力は失って以来、こうう唱続けられてきた。この言葉が少年時代から今日に至るまで、私はつき纏っているようである。多くの人々にとっても同じであろう。しかし、「あるが

まま』といわれても。「正直に」と言われても、ただこの態度だけで文章を書けるものではない。表面は、この教訓は実行し易いように見えるけれども、実は、むしろ、自分の正直な経験を軽く見て、美文の型に自分を合わせてしまう方が楽に書けるのである。「あるがままに…」とか、「正直に…」とか命ぜられながら、手も足も出ずに、私は密かにもがいていたようである。

（清水幾太郎『論文の書き方』）

①詩人も小説家も脚本家も、随筆を書きます。②新聞記者も、科学者も、教育家も、政治家も実業家も随筆を書きます。③しかし、そういう専門家として、あるいは職業人として書いては、よい随筆はできません。④専門家なり、職業人なりから、一人の人間にかえて書いたものでないと、すぐれた随筆になりません。⑤そういう意味では、随筆は人間手記であり、人生の報告書であるといえましょう。

西尾実『ことばの芸術』

以上、説明文や論証文では、トピック・センテンスが文章の表面に表れ、それが中心となってパラグラフを仕立てるのは普通であるし、また、そのほうがわかりやすい。パラグラフの統一は、このように、書き手がトピックを意識し、それをセンテンスとして表現することによって保たれるのである。

c.トピック・センテンスが表面に現れぬ場合

物語や記述文では、必ずしもトピック・センテンスが表面に現れないこともあるが、それでも、読み手がトピック・センテンスに要約しようと思えば、容易に要約できるような中心点がある場合もある。

鈴が鳴って、改札口が開かれた。人々は一度にどよめき立った。鉄の音が繁く聞こえ出す。改札口の手摺へつかえた手荷物や口を斜めて引っぱるひとや本流から食み出して無理に復、還らうとする人や、それを入れまいとする人や、いつもの通りの混雑である。巡査が厭な目つきで改札人の背後から、客の一人一人を見ている。

（志賀直哉『網走まで』）

このパラグラフにおいては、「いつもの通りの混雑」のようなキーワード

はみつかるが、トピック・センテンスというほどのものは見つからない。しかし、トピック・センテンスを要約しようと思えば、容易にできそうである。

#### 4.1.1.3 中日小主題の展開の対照研究

相似点：

以上を見ると、中日言語の相似点がはっきり分かるようになるのであろう。

- a.小主題を利用して、パラグラフの統一性を生み出すことである。
- b.両方の小主題はパラグラフの冒頭、真ん中、最後に位置することができる。

相違点：

以上の例を通して、幾つかの相違点が分かると考えられる。

a.中国語の場合、パラグラフの概念が強く、文章とはパラグラフの集まりであり、文章の構造はパラグラフの連なりとして考えられる。日本語の場合は、パラグラフの概念が弱く、文章に構造を与えているとは一概に言い難い。日本語では名詞と提題助詞「ハ」とが結びついた「主題」は文章に構造を与える上に重要な働きをしている。従って、中国語の主題がパラグラフの構造を与えるのに対して、日本語の主題はむしろパラグラフより直接的に文章に構造を与えるのである。

①那是一辆普通的纺车。②说它普通，一来是它的车架、轮子、锭子跟一般农村用的手摇纺车没有什么两样；二来是它是延安上千上万辆纺车中的一辆。③那个时候在延安。无论是机关的干部，学校的教员和学员，部队的指挥员和战斗员，在工作、学习、练兵的间隙里，谁没有使用过纺车呢？④纺车跟战斗用的枪、耕田用的犁、学习用的书和笔一样，成为大家亲密的伙伴。

(吴伯箫《记一辆纺车》)

言語研究の目的は、つまるところ言語の研究であって、どの研究分野も、基本的にはその目的とするところは変わらないわけであるが、当面の目的によって分けるとすれば、言語研究、或いは、言語分析の理論的側面の追求を中心とする理論言語学と、言語研究の成果を人の生活の様々な具体的問題の解決のために適用しようとする応用言語学との二つに分けることができる。ただし、分けたからといって違った二つ野学問になるわけではない。言語研

究という一つの学問の二つの側面である。理論の背景あつての応用であり、応用できてはじめて理論に正当性が与えられるのである。

（石綿敏雄『対照言語学』）

即ち、中国語のパラグラフと主題の支配領域とが一致しているが、日本語の場合は両者が必ずしも一致するとは限らない。

b.中国語の場合は主題が大体表面に現すのに対して、日本語の物語と記述文は主題が表面に表れないことが多いのである。

#### 4.1.2 文法的統一性

パラグラフの研究はもうすでに文法範囲を超えるが、内部の組織、文と文の繋がりはやはり文法方法によって探求されなければならないと思われる。

##### 4.1.2.1 中国語のパラグラフ

###### a.接続語句を用いること

パラグラフの段取りはよく要点をつかむ言葉或いは接続語句を使ってはつきりさせることが必要である。パラグラフには、文段を組み合える接続語句がたくさんある。調査によれば、使用率が高いのは、「但是」、「因此」、「所以」、「因为」、「可是」、「然而」、「由于」などである。

大礼堂的造型如此完美，色调如此清新，我们不能不赞叹建筑者杰出的创造和智慧。但是，在这样大的空间里，音响问题是怎样处理的呢？能保证坐在任何角落的人都听清主席台上的发言吗？

（周定舫《雄伟的人民大会堂》）

我常想，杨柳婀娜多姿，可谓妩媚极了，桃李绚烂多彩，可谓鲜艳极了，但它们只是给人一种外表好看的印象，不能给人以力量。松树却不同，它可能不如杨柳和桃李那么好看，但却给人以启发，以深思和力量，尤其是想到它那崇高的风格的时候，不由人不由然而生敬意。

（陶铸《松树的风格》）

パラグラフにおいて、接続語句を使う時、常に一組だけを利用するのではない。これは接続語句の使用上の一つの特徴である。これらの言葉を使って、一つのパラグラフのまとまりができたのである。

b.指示語を用いること

パラグラフにおいて、文と文の繋がりは指示関係によって統一されることも多い。代名詞、特に人称代名詞と指示代名詞が指示語の中心であるが、普通の名詞は指示語になることもよくある。

指示同一

パラグラフにおいて、ある言葉の項目は全部同じ実体を指す時、指示同一と見なすべきである。

我应该感谢母亲，她教给我与困难作斗争的经验。我在家庭中已经饱尝艰苦，这使我在三十多年的军事生活和革命生活中再没感到过困难，没被苦难吓倒。母亲又给我一个强壮的身体，一个勤劳的习惯，使我从来没有感到过劳累。

(朱德《母亲的回忆》)

「我」が全て主人公のことを指しているから、一種の流暢感が感じられる。

在革命艰苦的年代里，在白色恐怖的日子里，多少人不管环境的恶劣和情况的险恶，为了人民的幸福，他们忍受了多少的艰难困苦，做了多少有意义的工作啊！他们贡献出所有的精力，甚至最宝贵的生命。就是在他们临牺牲的一刹那间，他们想的不是自己，而是人民和祖国甚至全世界的将来。

(陶铸《松树的风格》)

「他们」が全て同じ人々を指すことによって、文の繋がりが完成されたのである。

指示内包

指示内包はそれぞれの指示言葉が対等関係ではなく、一般的に一つの指示意味がもう一つの指示意味を含めるのである。

“新诗！你们年青人就喜欢这一套东西！”吴荪甫似笑非笑的说，看了范博文一眼，……

(茅盾《子夜》)

「年青人」は「范博文」一人だけではないが、しかし、「范博文」は「年青人」の一人である。

指示排除

指示排除は指示内包と逆である。即ち、一つの言葉の項目は形式上もう一つの項目と対等しているが、語義上では含めていないということを指す。

他只好让他们从他的“堡垒”里抬出来,上了云飞轮船,终于又上了这“子不语”的怪物——汽车。长蛇阵似的一串黑怪物,头上都有一对大眼睛放射出叫人目眩的强光,……准对着吴老太爷坐的小箱子冲将进来!

（茅盾《子夜》）

「怪物」は車を指す上に、呉の車を指している、最後の文の「小箱子」も呉の車を指している。しかし、「黒怪物」は呉の車を指していない。従って、これらの言葉は統一性を備えているが、指示関係が違うのである。

c.文の繰り返しを用いること

文の繰り返しは同一文の繰り返しでもいいし、形式上だけが同じ文の繰り返しでもいいのである。従って、これは一種の文法用法になり、排比の修辭法になるのである。

理解一个人是很难的。理解一个数学家也不容易。至于理解一个恶意的诽谤者就很容易，并不困难。

（徐迟《哥德巴赫猜想》）

以中国最广大人民的最大利益为出发点的共产党人，相信自己的事业是完全合乎正义的，不惜牺牲自己个人的一切，随时准备拿出自己的生命去殉我们的事业，难道还有什么不适合人民需要的思想、观点、意见、办法，舍不得丢掉吗？难道我们还欢迎任何政治的灰尘、政治的微生物来玷污我们的清洁的面貌和侵蚀我们健全的肌体吗？……难道我们还有什么个人利益不能牺牲，还有什么错误不能抛弃呢？

（毛泽东《论联合政府》）

パラグラフには同じ形式の文型——「难道……吗……」を使っているから、全体の流暢さが湧いてくるのである。

#### 4.1.2.2 日本語のパラグラフ

a.接続語句を用いること

接続語句というのは、接続詞、接続詞的機能をもつ語句、接続助詞、接続

助詞機能をもつ語句の総称であるが、ここでは、接続詞及び接続詞的機能をもつ語句だけについて考える。接続語句は前後の文（あるいは節）相互を直接、論理的に関係付ける形である。

### 接続詞

接続詞は、接続語句の中核をなすものである。

清兵衛は十二歳で未だ小学校に通ってゐる。彼は学校から帰って来ると他の子供とも遊ばずに、一人よく町へ瓢箪を見に出かけた。そして、夜は茶の間の隅に胡座をかいて瓢箪の手入れをしてゐた。手入れが済むとお酒を入れて、手拭いで巻いて鐘に仕舞って、それごとコタツへ入れて、そして寝た。翌朝は起きると直ぐ彼は鐘を開けて見る。瓢箪の肌はすっかり汗がかいてゐる。彼は厭かずそれを眺めた。それから丁寧糸をかけて陽のあたる軒を下げ、そして、学校へ出かけて行った。

（志賀直哉『清兵衛と瓢箪』）

### 接続語機能をもつ語句

接続詞の他に、接続詞的に用いられる副詞、名詞また接続詞的に用いられる連語という接続語機能の語句もよく使われる。例えば、現に、一方、そのため、それに対してなどである。

#### b. 指示語を用いること

指示語はこそあど語句がその中心になるものであるが、こそあど語句以外の代名詞も、もちろん指示語である。さらに、「そういう」、「こういった」、「そうした」、「このような」、「そのように」、「こんなふうに」などの連語も、全体を一つの指示語として扱うことができる。また、「例の」、「次の」、「以上の」、「前者」、「後者」なども指示語のように用いられる。

#### こそあど語句

こそあど語句は主に四組があり、もの、場所、人を指すことができる。

午後、いつものやうに病人を残して、私はサナトリウムを離れると、収穫に忙しい農夫などの立ち働いてゐる田畑の間を抜けながら、雑木山を越えて、その①山の窪みにある人けの絶えた狭い村に下りた後、小さな溪流にかかつ



た吊橋を渡って、その②村の対岸にある栗の木の多い低い山へよち登り、その③上方の斜面に腰を下ろした。

（堀辰雄『風たちぬ』）

堀辰雄の『風たちぬ』において、指示語の使用率が極めて高いが、なかには、上のように、同一語句を繰り返して用いるときの限定指示の「その」の多用が目立つ。以上の三つの「その」のうち、③の「その」は、明らかに前出の「山」を指す実質指示の用法であるが、①の「その」は、前出の「雑木山」をさす限定指示の用法、②の「その」も、「村」が前出の「村」であることを示し、限定指示の用法である。

#### 代名詞

パラグラフにおいて、文と文の接続を緊密にする方法の一つに代名詞があることはいうまでもない。代名詞は、前文の名詞を指し示すため用いるものであるから、どうしても読者に代名詞によって前文の名詞を思い起こさせる結果になり、文の繋がりが緊密にされるのである。ただ、代名詞は指示するものがあいまいだったり、離れた場所の名詞を指示したりすると、かえって意味の繋がりがわるくするから用心しなければならないと考えられる。

①海岸に小さいな町の駅に降りて、彼は、しばらくはもの珍しげに辺りを眺めていた。②駅前風景はすっかり変わっていた。③アーケードのついた明るいマーケットふうの通りができ、その道路も、硬く舗装されてしまっている。④はだしのまま、砂利の多いこの道を駆けて通学させられた小学生のころの自分を、急になまなましく彼は思い出した。⑤あれは戦争の末期だった。⑥彼はいわゆる疎開児童として、この町にまる三ヶ月ほど住んでいたのだった。——⑦あれ以来、おれは一度もこの町を訪ねたことがない。⑧その自分が、今日は大学を出、就職をし、一人前の出張帰りのサラリーマンの一人として、この町に来ている。

（堀辰雄『風たちぬ』）

このパラグラフは「彼」を中心として、展開したのである。

c.文の繰り返しを用いること

これは文法の使い方であるから、語彙の繰り返しと違うのである。文の繰り返しは前文の文型をそのまま繰り返したり、また同じ構造の文を連続的に使ったりことを指す。これも繋がりをよくさせる効果的な方法である。

〔例一〕智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。

(夏目漱石『草枕』)

〔例二〕住みにくさが高じると、安いところへ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生まれて、画が出来る。人の世を作ったものは神でもなければ鬼でもない。矢張り向ふ三軒両隣りにちらちらする唯の人である。唯の人が作った人の世が住みにくいからとて、越す国はあるまい。あれば人でなしの国へ行く許りだ。人でなしの国は人の世より住みにくからう。

(夏目漱石『草枕』)

〔例一〕は文型の繰り返しであり、「…すれば…する(だ)」という文型の繰り返しになっている。〔例二〕は文末の語を繰り返して次の文を始めており、一種のしりとりである。こういう用法も漱石独特のレトリックであるが、繰り返しによって、文から文への移行が容易になれることが事実である。

#### 4.1.2.3 中日文法的統一性の対照研究

相似点：

- a. パラグラフの統一性に中日両言語の接続語句は重要な役割を果している。それに、並列、累加関係、逆説関係の接続語句は両方の中心となる。
- b. パラグラフの統一性に中日両言語の指示語は重要な役割をしている。それに、指示語というと、人称代名詞と指示代名詞は両方の中心となる。
- c. パラグラフの統一性に中日両言語の文の繰返しは大変役立っている。文の繰返しは、両言語とも前文の文型をそのまま繰り返したりとか、同じ構造の文を連続的に使ったりとかである。修辞法の一つで、内容を強調する手法である。

相違点：

- a.中国語の接続語句より、日本語の接続語句の数が更に多いから、パラグラフ中の使用率が更に多いのである。それに、中国語が並列、逆説関係の接続詞をよく使うのに対して、日本語は順態関係、累加関係、解説関係、対比関係の接続詞をよく使うのである。
- b.指示語について、中国語とも日本語とも人称代名詞と指示代名詞を中心とするが、日本語は主語の省略現象が多いので、中国語ほど人称代名詞を使わないのである。

## 5. 終りに

### 5.1 結び

日本の言語学者はテキストに力を入れてから、数多くの方がテキスト全体の構造、各パラグラフの相互関係などを研究するし、テキストを構成する直接成分のパラグラフの構造を研究の方が少ないと思われる。それに、特に中国語と日本語を対照しながら、パラグラフの統一性はどこが違うかを研究する中国の方も、日本の方もほとんどいないのである。筆者は日本語学習者として、現在の日本語勉強においても、さらに将来の日本語教育においても、語の繋がり、文の繋がり、パラグラフの統一、そしてテキストのまとまりの重要性も感じられる。なぜならば、文法にあっているのに不自然だと感じたり、テキストの内容を捉えることが難しかったりすることはよく出てくるからである。従って、本論は小主題の展開、文法的統一性という二つの方面から中日テキストのパラグラフの統一性を対照し研究したのである。分析結果として、数多くの相似点と相違点が出てきた。

### 5.2 今後課題

テキスト全体の結束性的手段はパラグラフの統一手段と共通するところはいうまでもなく、テキストの結束性はまた特別な手法がないが大変探求する価値があると考えられる。もう一つ、対照して出た結果は実践中に適用しないと、意義がないから、日本語作文、読解、さらに将来の日本語教育などにおいて本稿でまとめた結論を生かすことが今後の課題にもなると思われる。

注：

- [1] halliday and hasan『英語の関連』「結束性のあるテキストを組み立てるには、同一物指示、代用、省略、つなぎ語と類義語、関係語が有効である。初めの四つが文法上の結束性に関与し、類義語、関連語の類は語彙上の結束性に寄与する。」p57
- [2] 森岡健二『文章構成法』至文堂 1964。「段落とは比較的長い文章の部分として区別され、それぞれ小主題によって統一されている文集のものを指している。」p112
- [3] 董魯安『修辞学』第3版 北平文化出版社 1929. p109-139
- [4] 赫長留『文段知識』北京出版社 1983. p32-76
- [5] 鄭文貞『段落の組織』福建人民出版社 1984. p16-17 p100-114
- [6] 時枝誠記『文章研究序説』明治書院 1777. p215
- [7] 永野賢『文章論総説』朝倉書店 1986. p77-78
- [8]『日本語要説』 p239
- [9] 野村眞木夫『日本語のテキスト——関係・効果・様相』ひつじ書房2000. p1
- [10] 田中望『日常言語における説明について』慶応義塾大学国際センター p57
- [11] 胡壮麟『語篇の銜接と貫通』上海外国語教育出版社 1984. p1
- [12] 橋内武『ディスコース談話の織り成す世界』くろしお出版社 1999. p22-24
- [13] 盛岡健二『文章構成法』至文堂 1964. p77
- [14] 鄭文貞『段落の組織』福建人民出版社 1984. p1
- [15] 森岡健二『文章構成法』至文堂 1964. p112
- [16]『国語学辞典』 p132
- [17]『日本語要説』 p241
- [18] 池上嘉彦『テキストとテキストの構造』国立国語研究所 1983. p56
- [19] Kジョンソン・Hジョンソン編 岡秀夫訳『外国語教育学大辞典1999. p77
- [20] 橋内武『ディスコース談話の織り成す世界』くろしお出版社 1999.p56

参考文献：

- 1. 野村眞木夫『日本語のテキスト——関係・効果・様相』ひつじ書房 2000
- 2. 永野賢『文章論総説』朝倉書店 1986
- 3. 大野晋『日本の言語学』大修館書店 1978
- 4.『論説文の文段中心文と文段に見られる特徴・表現意図と反復語句の観点から』国際学友会日本語紀要
- 5. 市川孝『国語教育のための文章論概説』東京：教育出版 1979
- 6. 時枝誠記『文章研究序説』明治書院 1977

7. 山口仲美『文章・文体』有精堂出版株式会社 1980
8. 盛岡健二『文章構成法』至文堂 1964
9. 橋内武『ディスコース 談話の織り成す世界』くろしお出版 1999
10. 池上嘉彦「テキストとテキストの構造」『談話の研究と教育 I』国立国語研究所 1983
11. 西田敏直 文章一時枝誠記文章論を中心に『国語と国文学』東京：
12. 許余龍『対比言語学概論』上海外语教育出版社 1989
13. 胡壮麟『语篇的衔接与贯通』上海外语教育出版社 1984
14. 張德祿, 劉汝山『语篇貫通与衔接理論的發展及応用』上海外语教育出版社 2003
15. 嘯馬, 遊友基『文章原理初探』福建人民教育出版社 1980
16. 王緝『复句・句群・篇章』山西人民出版社 1985
17. 鄭文貞『段落的組織』福建人民出版社 1984
18. 郝長留『语段知識』北京出版社 1983
19. 馬兰英 日語語篇中的語彙衔接方式初探『解放軍外国語学院学报』 2001.5